

# 大震災三〇年目の検証

## 能登半島地震を受けて

二〇二五年一月は、能登半島地震から一年、そして阪神・淡路大震災から三〇年にあたる。能登では復興にむけた取り組みの最中に豪雨災害が襲い、一年を振り返れる状況ではないが、災害をめぐる阪神・淡路大震災から三〇年という歳月の間に積み重ねられたものは大きく、能登の災害を振り返り、復興にむけた取り組みにどう生かすかが問われているのではないだろうか。



神戸大学名誉教授  
室崎益輝

### 1 はじめに

昨年、日本の防災対策のあり方を根底から揺るがす地震が、能登半島で起きた。その能登半島地震は、甚大な被害と引き換えに、日本の震災対策の弱点を白日の下に晒した。三〇年前の阪神・淡路大震災から何ら進化していない厳しい現実が露呈し、大震災からの伝承や復興のあり方が、問われることになった。そこで本稿では、能登半島地震が提起した問題を明らかにするとともに、それを受けて阪神・淡路大震災の検証をはかることの重要性を指摘しよう。

### 2 能登半島地震の特質と要因

まず、二〇二四年の一月に起きた能登半島地震とそれが提起した問題点に触れておこう。

#### (1) 地震の特質

地震は、能登半島先端部の深さ一六kmを震源として発生した。マグニチュードは七・六で、阪神・淡路大震災や熊本地震の七・三を上回る。阪神・淡路の何倍ものエネルギーが放出された。これにより動いた断層の長さは一五〇kmと、阪神・淡路大震災の五〇kmを遥かに超える。前例のない地震が起きたといえる。その地震の顕著な特質として、地表面の激しい揺れが三〇秒から一分と長く続いたこと、最大四〜五mの激しい地盤の隆起を伴ったこと、さらには九月の記録的豪雨との二重被災に見舞われたことを指摘しておきたい。

長時間の揺れは、共振による甚大な被害をもたらしている。屋根の重い家屋は、振り切れるように倒れ込んでいる。砂状の地盤は、液状化し大規模な側方流動をもたらしている。そのため、家屋の倒壊率は阪神・淡路を上回り、液状化の発生件数は熊本

を上回った。

激しい地盤の隆起は、家屋の倒壊だけでなくライフラインの寸断、さらには大火をもたらしている。道路が各所で破壊され、救助や復旧の妨げになっている。水道管はことごとく破壊され、生活再建を苦境に追い込んでいる。さらに河床の隆起で川の水がなくなり、輪島の大火を許している。

地震と豪雨の重合は、被災者の物心両面にわたる被害激化を招いている。地震からの回復途上にあつた被災地と被災者を、再び奈落の底に追い込んでいる。追い打ちをかけた豪雨が、地震からの復旧を振り出しに戻し、地震での傷口をさらに広げている。復興への一縷の希望をも打ち砕いている。

#### (2) 被災の特質

奥能登の珠洲、輪島、七尾、能登、穴水、志賀の三市三町の被害は、一月二六日現在で、死者・行方不明が四五九人（関連死二二九人を含む）、被災建物が約四万九〇〇〇棟（全半壊約二万二〇〇〇棟を含む）となっている。死者数と関連死者数は

#### ひろさき・よしお

一九六七年京都大学工学部建築学科卒業、京都大学助手、神戸大学工学部助教授、同大学工学部教授を経て、九七年より同大学都市安全研究センター教授。二〇〇四年四月より独立行政法人消防研究所理事長、二〇〇六年四月より消防庁消防研究センター所長。二〇〇八年四月より関西学院大学教授、二〇一七年四月より兵庫県立大学減災復興政策研究科長、二〇二二年四月より減災環境デザイン室顧問。二〇〇九年より二〇二四年四月まで石川県災害危機管理アドバイザーも務める。

熊本を上回る。棟数あたりの全半壊率は、阪神・淡路を遥かに上回る。被災密度が前例のないほどに高い。

この被災の特質は、激甚性、多様性、複合性、長期性にある。激甚性では、被災者一人ひとりの苦しみや悲しみが限りなく大きい。三市三町の世帯数あたりの被災率を見ると約七割と高く、輪島と珠洲の被災住戸あたりの全半壊率を見ると約六割と高い。ほぼすべての人が壊滅的な被害を受けている。

多様性では、多様な加害により多様な被災が現出している。地面の揺れ、津波の襲来、山腹の崩壊、岩石の落下、河道の閉塞、市街地の火災などが、生命、生活、生業、生態系をことごとく破壊している。自然や文化の破壊、景観や産業の破壊、地域経済の破壊が深刻である。心理的ダメージも前例のないほどに大きい。複合性では、被害の連鎖が間接被害の拡大をもたらしている。家屋の被災が人口流出を生み、人口流出がコミュニティの崩壊を呼ぶといった形で、被災が複合し拡散している。コミュニティの崩壊や地域経済の衰退が深刻である。関連死にも歯止めがかからない。

長期性では、復旧や復興が著しく遅れている。住宅再建のテンポは、阪神・淡路の二倍遅い。倒壊家屋の解体作業が遅々として進まない、応急仮設住宅の建設が大幅に遅れるといったことで、多くの人が被災地外での仮住まいや壊れた家屋の中での退避生活を強いられている。